

清沢満之の教団観

高山秀嗣

〈はじめに〉

明治期の仏教者であった清沢満之（一八六三～一九〇三・以下、清沢）は、さまざまな意味で近代を体現した人物であったと見ることが可能であろう。

また近代仏教伝道史全体を考えていくに際して、教団という観点は不可欠のものとなってくる。ここでは清沢の教団観を取り上げることによって、清沢という仏教者を近代仏教伝道史上に位置付けるための糸口としていきたいと考えている。

さて今回は清沢の教団観と題して、清沢がこの明治という時代に真宗大谷派（以下、大谷派）という教団をどのように観じ、またどのようにに教団と関わっていかうとしたのかというその軌跡について教団改革運動（以下、改革運動）を中心にしながら考えてみたい。ここでは明治二九年一〇月から翌三〇年一月にかけての、最も改革運動の気運が高まり、そして終息していく時期に焦点を当てつつ見ていくことになる。

若い頃、東京大学において学問研鑽した清沢は、大谷派からの要請に応えるかたちで京都に戻っていく。そこで清沢が目の当たりにした教団の実態は、清沢の思い描いていた理想的な教団像とは大きく異なったものであったと想像される。実際に京都に戻って以降の清沢は、教学による教団の建て直しを真剣に考え、それに力を注いでいったのである。

しかしその活動はなかなか思うように進まず、それに失望した清沢は東京留学生を中心とした同志らと手を携えて改革運動に取り組んでいくことになる。その運動は結局ある意味で挫折していくのであるが、この清沢らの運動を通して教学を中心とした教団への転換が大谷派において徐々になされていったのであるといえよう。

清沢が宗門の置かれた現状を憂いていたことは、近代という時代に仏教（真宗）がどのように対応していくかという問題も含めてであったと思われる。そしてその近代の進展の中で、自分が所属する大谷派がどのようなかたちで近代化を遂

げていくかという点にもあった。清沢が考えていた近代化という課題は、真宗が思想的にいかなる近代化をしていくかということが中心であつたと考えられる。

清沢は、教団を教学の場として捉えていた。そして自らの生きる時代である近代において、教団は思想を広く世界に向けて発信していく存在でなければならぬと考えていた。それを、古い要素が多く残存していた教団内においてやり遂げようとしたところに清沢の苦勞がある。ただこのような清沢の思いは、多くの共鳴者の運動への参加を得ることによって大谷派自体に大きな変革を迫る運動となつていった。

その一連の活動を通して清沢は、近代における仏教教団というものの理想を具体化しようとしていったのである。清沢自身の禁欲生活も、結局はあるべき仏教者や僧侶の理想像を目指したものであり、それを自らが範として率先して示そうとしたものであつた。また教団における教学の強調も、社会への伝道や教育による精神の継承を核としたものであつたといえる。対外的には教学が何よりも大切であり、それは仏教の教えを広く浸透させ、かつ近代における大谷派教団の意義をあらためて社会に主張していくよい契機となるのである、という意識を清沢はもつていた。

〈清沢満之の教団改革運動と教団観〉

白川村に居住して宗政への提言を行った清沢らは「白川党」と呼ばれ、宗門内外の注目を広く集めるようになっていった。これは、東京帰りのいわばエリートである大谷派の東京留学生が中心になつて構成された集団であつた。明治二九年一月の『教界時言』創刊とともにこの改革運動が始まつていたのであるが、清沢はこの『教界時言』に論文を矢継ぎ早に発表し、改革運動の方向性を定めていったのである。これらの一連の論文においても、教学を強調しつつ宗門を憂うという清沢の姿勢は一貫しており、清沢の改革運動の力点がどこに存していたのかをよく知らしめるものがある。しかしこの改革運動も、明治三〇年一月の大谷派革新全国同盟会の解散が宣言され、『教界時言』自体の方針も転換することなどにより終焉を迎えていったのである。

清沢にとつて教団とは、あくまでも自分の思いを実現するための壮大な実験の場であつたということができようであろう。清沢にとつて大谷派は、決して狭い舞台ではなく自分自身の人生を賭けるに値する存在だったのである。清沢にとつて実際に教団は存在する意義があるものであり、それは大谷派が真宗の宗義を正確に継承していくことにより、その精神が広く拡大していく源泉となることを見越していたからであつ

た。

清沢自身は教団の現実を憂いつつも、将来像についてはしっかりと見据えていたので、大谷派全体の後継者養成ということは非常に大切なものであると考えていた。実際に、途絶していた東京留学生制度の再開に始まり、自由な討論と討究による近代に即応した新たな宗学の発見、真宗大学の東京移転、学問や思想の社会的展開などが清沢の主導により次々と行われていったのである。

清沢は、よい意味での理想主義的な面を有していたといえる。清沢は教学によって大谷派の根本精神が変化し、時代に応じた変質をすることによって、大谷派から日本全国あるいは世界に対して真宗思想を積極的に発信できると確信していた。またそれが、教団という場を通して行われることが近代仏教の特徴であると清沢は考えていたと思われる。

そのような意味からするならば、清沢の強調した教学は伝道と教育という二つの面があったが、思想を社会的存在化させていく意味からは伝道に対する意識が非常に高かったともいえる。真宗思想の適確な継承が求められていた近代において、他の要素をいったん脇に置いた上で教学の重要性を繰り返し説いていく清沢のあり方はやや実際的でなかったと見ることもできるかもしれない。しかし清沢は、教学が布教と学事の両方を併せもつものであり、広く教えを伝えていく布

教的側面と学事すなわち教育によって各寺院の後継者の養成を行い、大谷派が将来的にも存続していくための基盤作りを行おうとしていったのである。清沢が行っていた改革運動は、将来を見据えた上での教学の重点化であったと見ることができると思われる。

清沢は、教団に対して多大な期待をかけていた。だからこそ、自らの人生を大谷派に賭けても後悔しなかったのである。清沢の教団観は、「大谷派なる宗教的精神」を最も根幹に位置付けつつ、そこで培ったものを基盤とし広く社会に開かれていくことを予定したものであった。

〈まとめにかえて〉

こうして清沢の生涯を教団との関わりを基軸としながら概観してみると、清沢の有した思いが教学による教団の再生にあったことが知られる。これは東京遊学期からの学問重視という清沢の姿勢や、さらに東京で出会った学友との親密な交流も清沢の行動に多大な影響を与えていたと考えられる。清沢の教団観は、明治期の現実社会に生きる自分自身の存在を通して真宗思想を伝えていこうと試みる清沢自身の取ったさまざまな行動によっても、明らかに示されていると言い得るのである。

後に真宗大学の東京移転に力を注いでいることから窺え

るように、清沢は教育に大変力を入れ続けた人物であったが、それはあくまでも大谷派の将来にとって一般の人たちを教え導く存在としての僧侶を教団内で養成することが必要であるとの思いがあつたからである。

また清沢は改革運動の挫折の後、方向を信念の確立に転じていくのであるが、それに際しても清沢の基本にあつたのは教学であつたと考えられる。だからその信念の確立は、自分だけの救済を最終的な目標とするのではなく、最終的に大谷派を場として真宗思想を普遍化していくための試みの一環としてのあり方であつたと評することができる。

清沢は教団を「大谷派なる宗教的精神」の生き生きと息づく場として認識し、その本来性は教学によってこそ回復可能であると考えていた。

教団（大谷派）の本来性回復↑教学―布教（伝道）―真宗（思想）普遍化

「学事・教育」―人材育成

清沢にとつての教団とは「大谷派なる宗教的精神」を涵養する場であるとともに、教学の重用によって近代に即応した新たな変容を時々刻々と遂げていく有機的なものでもあつたのである。

総じて清沢は、伝道者としての側面を有しつつ、宗教的実

践や教育に対しても強い意欲を燃やした仏教者であつたといえるのではないだろうか。そしてそれが、大谷派という場において自らを通して実験されていったところに、清沢の教団にかける期待と大谷派なる宗教的精神というものに対する深い敬意を感じ取ることができるように思われるのである。

〈参考文献〉

- ・大谷大学・編『清沢満之全集七八九』（岩波書店、二〇〇三年）
- ・教学研究所・編『清沢満之生涯と思想』（真宗大谷派宗務所出版部、二〇〇四年）
- ・西村見暁『清沢満之先生』（法蔵館、一九五一年）
- ・岡田正彦『清沢満之と真宗大谷派』（『大正大学大学院研究論集』一五号、一九九一年）
- ・小野蓮明『解説』（『清沢満之全集九』岩波書店、二〇〇三年）
- ・柏原祐泉『近代における教団論の様態』（『日本近世近代仏教史の研究』平楽寺書店、一九六九年）
- ・森 龍吉『真宗教団改革の二形態』（『仏教研究論集』清文堂出版、一九七五年）
- ・安富信哉『僧伽的人間として』（『清沢満之と個の思想』法蔵館、一九九九年）

〈キーワード〉 清沢満之、真宗大谷派、教団、教学

（佛教大学総合研究所嘱託研究員・博士〈文学〉）

In the Taiseki-ji school of Nichiren Buddhism, it is claimed that the most profound and important teachings of Nichiren have been passed exclusively from one high priest to another, through a process of “transmission of the heritage of the Law to only one person” (*yuiju ichinin kechimyaku sojo*). The purpose of this paper is not to ascertain whether this claim is true or not, but to point out that the core content of this so-called secret transmission of teachings appears to have already been disclosed by the school’s 26th high priest, Nichikan. In this paper, I will clarify the validity of my hypothesis by reexamining Nichikan’s writings from the viewpoint of disclosure of the transmission teachings of the Taiseki-ji school.

45. Daisetz Suzuki and Meister Eckhart: An approximation of common precepts concerning Buddhism and Christianity

Shinji WADA

Over the past several centuries, remarkable progress has been accomplished in many fields of our world via scientific thinking and analysis. Yet, despite all the technical apparatus of our sciences, we still cannot fathom the many mysteries of life.

The idea of this treatise aims to demonstrate a common thread of thought running between the Buddhist scholar Daisetz Suzuki and the Christian mystic Meister Eckhart. Through our studies of these two religious giants a globalistic view will emerge.

46. Kiyozawa Manshi’s Understanding of the Sangha

Hidetsugu TAKAYAMA

How did the Meiji Buddhist Kiyozawa Manshi consider the Shinshu Otani school to which he belonged? Further, what was Kiyozawa’s ideal sangha? I would like to address these questions in this paper. In order to follow a request from the Otani school, Kiyozawa, who had studied in Tokyo, returned to Kyoto. It is easy to imagine that the Sangha that Kiyozawa had pictured in

his mind and the actual situation he faced in Kyoto were vastly different. In fact, after returning to Kyoto, Kiyozawa gravely pondered over how the Otani school could be reformed. This plan did not go smoothly, however, and the despondent Kiyozawa, along with comrades, began a reform movement. Although this movement would fail, through this failure the Otani school gradually shifted to a scholarly denomination. Through examining Kiyozawa's life and his relationship with the Otani school, it is obvious that he held that restructuring of the sangha could be done through the restructuring of doctrine. Hence, Kiyozawa's understanding of the sangha can be seen through his own existence as an individual living daily life in the Meiji period, and also in his attempt at modernizing and personifying Shinshu doctrine.

47. Kiyozawa Manshi's View of Reason

Akinori TAMURA

On Kiyozawa Manshi's view of reason, there is a famous statement in his first book, *Shūkyō tetsugaku gaikotsu*. In its English translation, *The Skeleton of A Philosophy of Religion*, the passage runs as follows:

If there are two propositions, the one of reason and the other of faith, we should rather take the former instead of the latter.

Based on this statement, it has been suggested that in his early period Kiyozawa considered reason more important than faith. However, we should also note the following statement in the same book.

But remember that the nature of reason is incompleteness, i.e., reason can never be complete in its range or series of propositions, one proposition linking to or depending on the other ad infinitum, so that if any one relies on reason alone, he might never be able to attain the solid resting place of religious belief.

From this, we can understand that Kiyozawa was aware of the problem of reason. Therefore, when we consider Kiyozawa Manshi's view of reason, we must take into account both his appreciation and criticism of reason.